

2023年12月末、JR連合に再びJR総連側の内部文書が届いた。タイトルは「JR総連近畿地協定期委員会での組織破壊行為に対する見解」というもので、JR貨物労組内で決議された文書のような。同見解では、JR東海労役員がJR総連批判の発言を行った2023年11月のJR総連「近畿地協第35回定期委員会」において、「JRサービック労働組合」（以下、JS労と記載）を巡る内部対立を指摘した「民主化闘争情報No.1037」と「9月8日付JR総連見解」を両面刷りにした文書がJR東海労側から配付されたとのことで、その行為を「組織破壊行為」であったと12月27日付で決議している。JR総連近畿地協の議長はJR貨物労組関西地本委員長津崎修氏であり、「JS労」を巡って、JR東海労は、JR総連ほかJR貨物労組など加盟他単組とも対立関係となっていることが明らかにされた形だ。

JR東海労は12月14日、第40回臨時大会を開催した。JR東海労の広報紙では、JR総連の山口浩治委員長は、「JS労をより良い労働組合にしていくために共にがんばろう」と連帯の挨拶を行ったとされていたが、内情はまったく違い、やはり激しい内部対立を抱えていたのだ。

～JRサービック労働組合を巡るJR総連との内部対立～

JR東海労がHPで内情を暴露

驚いたのはさらに年明けだ。このJR総連近畿地協での対立やJR東海労第40回臨時大会での対立を暴露する文書がJR東海労新幹線関西地方本部のホームページで公開されていたのだ。

まず12月27日付で、「過ちては改むるに憚ること勿れ」という表題の文書が公開された。これは、前述のJR総連近畿地協における対立の内情を暴露するものだ。この表題は、“誤りがあったらそれを躊躇することなく直せ”、という意味合いのことわざ（出典「論語」）で、JR総連側の対応を「誤り」と断じた形だ。ここでは、前述の津崎議長からJR東海労役員に対し、「組織破壊行為」と認定した経緯を伝えたやり取りが明かされ、JR東海労側は強く反発している。

さらに12月28日付でJR東海労第40回臨時大会の「大会発言集」が公開された。ここには議事録に近い形で大会の詳細な発言が記載されており、山口委員長は挨拶で「JS労」を認めるような発言を行う一方、JR総連近畿地協定期委員会での「組織破壊行為」に言及、さらにJR東海労とJS労との二重加盟は解消すべきだと、JR東海労側のスタンスを否定する発言を行っている。これに対しJR東海労の代議員からは反発するヤジが飛んだほか、大会発言としてもJR総連側と真っ向から対立する意見が相次いだようだ。

JR総連は内部対立を公表されるのがそんなに嫌なのか!?

JR総連は、JS労を巡る内部対立を公にしたくはなく、この労組の存在すらも明らかにしたくはないのだろう。機関紙「JR総連」（2024/1/1付）には、山口委員長の新年挨拶が掲載されたが、「JS労」等の固有名詞は一切ない。驚くべきは、JR東海労の淵上利和委員長の挨拶文も、「新労組結成」という言葉だけで、当該労組の名前はないのだ。ちなみに、機関紙「JR東海労」（2024/1/1付）における山口・淵上両委員長の挨拶文には「JS労」の単語が出ている。この違いは何か。JR総連は、内部対立の事実を公表されるのがよほど嫌なのだろうか。

JR貨物労組「総団結問題」と同じく背後に革マル派の影が…?

ところで、JR貨物労組中央本部と関東地方本部間の「総団結問題」は、革マル派に属すると見られる活動家が関東地本と接点を持っていることが判明したことで、一気に問題が大きくなった側面がある。当該活動家は、JR東海労から分裂した「JRひがし労」の結成に関わったとみられ、JRひがし労の役員もまた「横断的労働組合の創造」に向け、全国行脚しているとも聞く。以前に指摘した通り、JS労の結成等は、外形的には「JRひがし労」の取り組みに近い。もし仮に、そうした「JRひがし労」役員の接触がJR東海労にあるのだとすれば、今回のJS労を巡るJR総連とJR東海労の内部対立の背景にも、JR貨物労組「総団結問題」と同様に、背後で革マル派が関わっている可能性はないのか。仮にそうなら、JR貨物労組も無関心ではいられないはずだ。JR総連の指導性も大いに問われることになる。内部対立がさらに深刻化していくかも知れない。JR総連が問題の公表をとにかく嫌がり、新労組の存在すら隠そうとするのは、そうした理由からなのだろうか。今後の動向が注目される。